

# 金研

先達との出逢い

きんけん  
ものがたり

# 物語

## 戦後の鉄鋼業界をリードした 今井勇之進先生

東北大学名誉教授 増本 健



### 略 歴

1931年 東北帝国大学工学部金属工学科卒業  
1932年 海軍航空技術廠へ入廠  
1940年 東北大学金属材料研究所助手  
1943年 同 助教授  
1947年 同 教授  
1971年 東北大学停年退官 東北大学名誉教授  
1979年 日本学士院会員

### 学会・社会活動

日本学術会議会員(第8期)  
日本金属学会会長  
金属博物館館長

### 受 賞

日本学士院賞  
日本金属学会賞  
本多記念賞  
アメリカ金属学会フェロー  
勲二等瑞宝章  
文化功労者

今井先生(右) 著者(左)

### ■ 新渡戸稲造の教え ■

今井勇之進先生が急逝されたのは、94才を迎えようとする直前の平成13年9月でした。その生涯は、明治・大正・昭和・平成の4代に亘り、正しく戦前・戦後の激動の時代を過ごされました。先生は、明治40年10月12日旧柳原村小島(現長野市)の旧家今井酒造の長男として生まれ育ちました。そして、中学時代(現高校に相当)に、当時の代表的国際人であり教育者であった「新渡戸稲造」の教えに感化されたのでした。その教えは、「大事をなすには人との出会いが大切である」、「人間性を養うには、名著や古典、歴史書と親しむべし」だったそうです。先生の人生は、まさにこの教示に生きたと言えます。

### ■ 日本の鉄鋼材料研究分野の第一人者 ■

旧制第4高等学校を終了した後、昭和3年東北帝国大学工学部金属工学科に入学、昭和6年に卒業されました。その後、直に海軍航空技術廠に入廠されましたが、不運にも病に倒れ、昭和8年から7年間の永い闘病生活を過ごされました。この青春時代の生死を分ける病床生活において、多くの文学書を読み、宗教に興味を持ったとのこと。7年後、奇蹟的に完治した先生は、昭和15年春に恩師村上武次郎先生から請われて金

属材料研究所に助手として入所し、戦後の昭和22年村上研究室「特殊鋼部門」のあとを引き継いで教授に昇進されました。

金研時代の研究は、特殊鋼のみならず鉄鋼全般の広い分野に及んでおり、戦後におけるわが国の鉄鋼材料分野の第一人者として大きな役割を果たしました。

当時のわが国の急速な復興は、主に鉄鋼業の発展に負うところが大きく、わが国の粗鋼生産量が一億トンを超えて世界一になった時代でもありました。そのため、研究室には多くの企業研究生が在籍し、委託研究費にも恵まれていました。主な業績としては「鋼におよぼす微量元素の効果に関する系統的研究」が挙げられます。特に、国際的には「窒素の今井」として高く評価されたことは有名であり、この研究により日本学士院賞を受けています。その他、鋼の恒温変態組織図(博士論文)、合金鋼・耐熱合金の冶金学的研究、半均質炉冷却媒体用材料の研究などがあり、これらの一連の研究によって、本多記念賞、日本金属学会賞を受け、さらに昭和54年に日本学士院会員、平成4年に文化功労者として顕彰されたのです。

### ■ 文学の素養と宗教心 ■

一方、先生に並々ならぬ文学の才能があった事は、晩年に自費出版された幾つかの

書から理解することができます。その一つである『ふるさと』(平成5年発行)には、廬生(てきせい)の筆名で俳句300点が掲載されています。また、親交された方々には、大学関係者以外に、皇族、社長、芸術家、音楽家など極めて幅広い著名人が居られました。世界初の金属博物館を仙台に創設する際、この広い交際を基に自ら多くの貴重な資料を収集し、その上、金属考古学を主題とする世界唯一の国際学術誌「Bulletin of the Metals Museum」を創刊しました。

晩年の昭和末期のバブル崩壊後は、先生の関心は我が国の将来に向けられ、著書『たどる』(平成8年発行)の中に現世相を心配する切々たる心情が述べられています。また、宗教への強い信仰心は、自叙伝『停年まで』(昭和46年発行)に見ることができ、学生時代のキリスト教外人牧師との出会いと信仰、急進派ホーリーネスへの入信、夏休みの京都知恩院無門閣の聴講などによって、常に心の糧を補う努力をされたことと述懐しています。先生が人生の最後をキリスト教の下で迎えられたのは、ご自身の強い希望であったと聞かれています。そして、9月19日早朝、家族、親族と病院関係の方々にも囲まれ、牧師の厳かな追悼ミサの下で見送られたのでした。